

(社)農協共済総合研究所  
調査研究部 主席研究員

渡 辺 靖 仁

## 目次

- 1 はじめに
- 2 分析の視角：疎結合関係と日常の復旧
- 3 支援事例1：遠くからの支援「5・22福島原発農産物風評被害に勝つぞ IN 名古屋」
- 4 支援事例2：近くからの支援「岩手県花巻市笹間地区水田農業再生ビジョン」
- 5 オーレスンの大火と復興
- 6 おわりに

## 1 はじめに

本稿の課題は、東日本大震災の被災地が困難を乗り越えて復旧しようとする状況に対して、可能な範囲で支援の手を差し伸べようとする活動事例を紹介し、その活動誘因の特徴を分析して復旧活動に求められるいわゆる「日常」を取り戻すことの意義を再検討することにある。

紹介する事例は遠くからの支援と近くからの支援それぞれ一つずつである。前者は、名古屋市で試みられた「被災地の農産物風評被害対策」を目的とした活動で、被災地産の農産物販売・ステージ活動・被災地を励ますメッセージの集積活動・東南海地震への広報活動をあわせ行った複合イベントである。後者は、被災地の近隣に位置する内陸から提案された「持続可能な集落営農」である。これらの活動は、遠近の違いこそあれ、被災地の住

民の生活と生業の復旧を第一に考えるという点で、いわゆる「災害資本主義」とは趣を異にすることが共通している。次いで、1904年の大火災からの損失を国家ぐるみで復興させて美しい観光地に変貌したノルウェー：オーレスンの町並みの生まれた背景を紹介し、復旧に本来求められる要素を考える素材を提供する。おわりに、日常の復旧の意義を再検討し、名古屋から被災地に贈られたメッセージを掲げる。

## 2 分析の視角：疎結合関係と日常の復旧

### 1) 疎結合関係

本稿の事例研究を評価する視角について述べる。ひとつは疎結合関係である。ウエイク（Weick, K. E.）の提唱した疎結合関係（ルースカップリング）とは、「連結されている諸事象が、相互に反応可能ではあるが、各々

の独自性を保持し、かつ、物理的あるいは客観的な分離性を有する」構造とされる(Weick 1976)。特に教育関連組織に関してこれを「ルースに連結されたシステム」であると主張した<sup>(注1)</sup>。この関係が認められる状況では、通常、各構成要素はそれぞれの特性に応じた活動を個々に独自に行っているものの、各構成要素間に共通の目的があるとその目的を達成するために要素が動的に結びついて新たな活動を積極的に行うという効果がある。

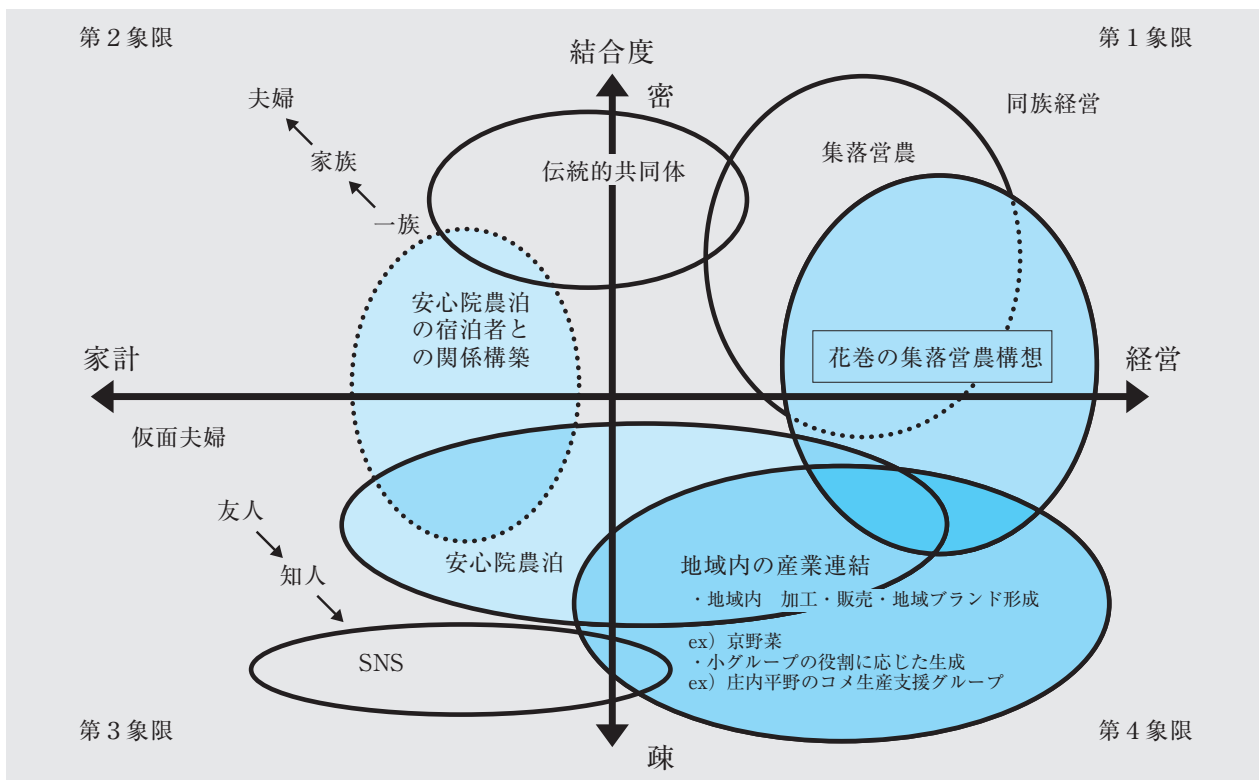
渡辺2011では、この関係に注目し、岩手県花巻市の集落営農構想とりあげた(図1)。この構想は、農業並びにこれを核とした付加価値を高める活動を地域全体の資源を結集して展開するものである。ここには、地域の経済主体の密なる結合関係による集落営農の実

践と、緩やかな結合関係(疎結合)による、互いに協力できる部分のくくり出しと産業化による結びつきという特徴が認められる。本稿ではこの構想を被災地から被災地を支援する事例としてさらに詳細に紹介する。

## 2) 日常の復旧

もう一つの分析視角は、被災地の「日常の復旧」である。東日本大震災からの復興が議論されはじめた当初から、いわゆる「創造的復興」と「日常の復旧」というふたつの考えが対立した。前者は、津波の被災地は100年河清を待っても得ることのできない新たなフロンティアの出現であると捉え、ここにあたかも「理想郷」をつくろうとするものである<sup>(注2)</sup>。現在提案されている公共部門による

図1 結合の疎密と家計・経営の分離



\*現地調査などにもとづき著者作成  
\*渡辺2011から再掲

復興計画のなかには、特区制度を設けて所有権・漁業権などの私権に制約を加え、大規模で効率的な農業・漁業の拠点をつくる計画がある<sup>(注3)</sup>。しかし関係者との十分な合意がない場合には、この計画は地域の意向からかけはなれ、生活インフラよりも生産インフラの再構成を優先する「構造改革」の推進となり、いわゆる「創造的復興」の方向性となるであろう。さらには震災復興と本来無関係なTPPへの参加の議論を絡め、これによってその準備とすといった主張や、論者によっては、これを機に一気に市町村合併と道州制を進め、強い自治体をつくり、クールな目による構想を実現すべきとする<sup>(注4)</sup>。

後者の「日常の復旧」は、「ふるさとの復活」という主張のように被災前の状況をまずつくり、「日常」を取り戻そうとするものである。住民の合意に基づく生活の再建を最優先する。この立場は、大災害からの復興を歴史に振り返る時、福田徳三が関東大震災の際に「大火によって破壊せられた生存の機会の復興」が重要と述べたことから、「創造的復興」に対置して「人間の復興」とも呼ばれる。

「人間の復興とは生存の機会の復興を意味し、生存機会の復興は、生活・営業・及び労働機会（これを総称して営生という）の復興の重要性を意味する」<sup>(注5)</sup>。生存機会の復興の順位としてまず始めに「生活」が掲げられている。

本稿では、「日常の復旧」を重視している。「日常の復旧」ができて始めてその後に「復興」を検討すべきという考えである。その理由は4つある。第一に、協同組合組織はあくまで組合員個人の日常の生活と生業の維持発

展に貢献するという目的を持つこと、従って第二に、被災者が目の前にある幸福をまず取り戻すべきであるという観点が導かれる。第三に、「日常の復旧」を第一にすれば、災害を奇貨とし地域住民を無視したいいわゆる「復興ビジネス」計画を抑止できる可能性が高まるからである。というのも、災害からの復興はしばしばトップダウンのグランドデザインによる全体主義につながりやすい。甚大な被害を迅速に乗り越えるために超法規的措置が要請されるからである。ところがこのような措置はいわゆる「災害資本主義」<sup>(注6)</sup>に転化する可能性を否定できない。これに対する懸念は、例えば小田切2011（資料1（132頁））のように、地域を歩いてそこに住む人の日常の話を聞いてきた研究者によって指摘されている。第4の理由は、災害で生まれる特別な共同体の維持のためである。一般に、大災害は特別な協同関係を生みだすことが知られている（ソルニット2010）。被害の共有による共感がその基礎である。この意識の成果を復旧後も維持するには、復旧した「日常」にこれを組み込むのがより自然と考えられるからである。

以下、ふたつの事例を紹介し、この疎結合関係と日常の復旧というふたつの分析視角にもとづくコメントを付す。

### 3 支援事例1：遠くからの支援「5・22福島原発農産物風評被害に勝つぞIN名古屋」

#### 1) イベントの概要

東日本大震災・原発事故に伴う被災地の農産物の風評被害対策の一助として、「5・22

福島原発農産物風評被害に勝つぞ IN 名古屋」(以下「支援イベント」とする)が催された。実施主体は日本福祉大学福祉経営学部佐藤皓一教授とそのゼミ生である。この種の支援は首都圏のいわゆるご当地ショップなどで被災地の酒類や一部野菜を中心にその販促活動がいくつか行われている。しかしこの支援イベントの特徴は、まず第一に、名古屋市繁華街の収容人数3000人規模の会場を用い、スタッフ130名を動員して行うなど、少なくともこのイベントの企画時点の5月では前例のない大規模なものであったことである(注7)。また、第二に、西日本は震災について無関係であるという風潮があるなかで、我が国の基幹産業である自動車製造業のお膝元である名古屋で行われたことに意義があった。支援イベントの趣旨書と概要を資料2(133頁)に付す。

イベント開催の前日、朝日・読売・毎日の3大全国紙に、事前の予告記事が掲載された(注8)。この種のイベントでは、新聞社は自社が広告の代理機能として用いられるのを嫌い、予告記事は掲載しないのが通常である。しかしこの支援イベントにあっては、その趣旨が3大新聞でも予告に値すると判断されたのであろう。特に読売新聞の社会欄では大きく紙面が割かれた。日本農業新聞は翌日23日朝刊に開催顛末の記事を掲載した。

このほか、開催当日の朝、NHKと名古屋テレビによる取材があった。NHK名古屋は当日の朝と昼のニュースで放送した。さらに、特設ステージにて協力するミュージシャンやそのファンによるネット・口コミ応援も行われた。

こうした広報活動と農産物の価格の柔軟な設定により、仕入れた農産物350キログラムはほぼ売り切った。

写真1



写真2



写真3



当研究所では、この支援イベントの主催者の協力を得て、会場の来訪者へのアンケート調査を行った。調査票を資料3(134頁)に付す。運営担当者が来場者に声かけし、任意で記入を依頼した。アンケート回答者は301名であった。会場がオープンなものであった

ため、支援イベントの総訪問者数の統計はない。従って本アンケート調査が訪問者のどれだけの割合を占めるかは不明である。ただこの301名は、同時に3000名収容できる会場にあってわざわざ立ち止まって調査票に回答してくれたことから、震災に対して極めて高い意識を持った集団であったと推察している。本節では、この調査結果を用いて震災と意識・行動の傾向を検討する<sup>(注9)</sup>。

## 2) アンケート調査結果

### (1) 主たる分析対象

アンケート調査結果は、全般的に、被災者と被災地にきわめて共感あふれるものであった。その理由は、ひとつには、支援イベントを実施した日が5月22日と震災から2月強経過していたものの、原発事故が収束の兆しを見せないことから被災地の農産物につき様々な風評被害が生まれていた状況であったこと<sup>(注10)</sup>、本アンケート調査が用意した設問「東南海地震が起きると思うか」という質問に対して回答者の9割がこれを肯定したことから、「震災は他人事ではない」という意識が強く、このため、被災地から離れた地域であっても、いわゆる「災害パラダイス」が現れる原因とされる被害の共有と共感の意識が発生していたものと推察される。

このアンケート調査の問5では、「あなたが東日本大震災で感じたことを教えていただけますか」という設問で、次の12箇の小設問を掲げ、おのおの「強く考えた」・「やや考えた」・「考えなかった」の3段階での評価を聞いた。12箇の小設問を以下に掲げる。

① 個人の幸せとは何かを考えた

- ② 社会の幸福とは何かを考えた
- ③ 自分のできる支援を被災地にしようと思った
- ④ 今日の前にある日常を大事にしようと思った
- ⑤ 節電しようと思った
- ⑥ 家族を大事にしようと思った
- ⑦ 友人との関係が大事と思った
- ⑧ 地域社会の人間関係が大事と思った
- ⑨ お金はかかっても、いざというときのために備えるべきと思った
- ⑩ 自分が被災していないことに安堵した
- ⑪ 被災地のかたがたに感動した
- ⑫ お金が大事と思った

これらの回答結果を基軸に震災に伴う意識の変化などの回答結果をあわせ用いて、震災によって自分が何を重視したか、社会をみる目が変わったか、その中で自分は支援活動をどう行うかの関連を分析し、疎結合関係の有無を検証する。

### (2) 日常を大事にするがゆえの支援活動

本項では、以上の12箇のうち、「日常の復旧」を重視する観点から、「今日の前にある日常を大事にしようと思った」ことへの回答割合が、その他の設問への回答結果とどのような関連があるかを調べようとした(樹形図1(136頁))。

この樹形図1によれば、震災で目の前にある日常を大事にしよう、「強く思う」割合は62%、「ややそう思った」割合は21%と、8割以上が日常の価値を再評価している。そして、「友人との関係が大事と思った」か否かで集団が分割される。友人が大事と強く思った割合は全体のうち55%の構成割合を占

め、この集団は目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は80%に上る（ノード2）。この集団は「地域社会の人間関係が大事と思った」か否かで集団が分割される。地域社会の人間関係が大事と「強く思う」割合は全体のうち46%の構成割合を占め、この集団の、目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は83%である（ノード8）。この集団は「自分のできる支援を被災地にしようと思った」か否かで集団が分割される。以降やや階層を飛ばし、「義援金付きサービスを行った集団は、全体のうち28%の構成割合を占め、この集団は目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は99%である（ノード28）。おそらく、被災者が日常を失いながらも互いに助け合う状況を知り、自らの平穏かつ幸せな状況をあらためて認識するとともに、可能な限りの支援を行おうと、どうせ何らかのサービスの提供を受けるなら、義援金付きのものを選んだのであろう。これが遠くから被災地を支援する活動の一番大きな割合を占めるものであった。

なお、最初の分割で「友人との関係が大事と思った」か否かにつき、友人が大事と「やや思う」割合は全体のうち21%の構成割合を占めている。この集団が目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は58%である（ノード1）。この集団は「節電が大事と思った」か否かで集団が分割される。節電が大事と「強く思う」割合は全体のうち9%の構成割合を占め、この集団で目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は82%である（ノード6）。日常を守るためにできることをしようとしているのである

う。この集団は自宅の空き部屋を被災者に提供する「ルームドナー」を行ったか否かで集団が分割される。「ルームドナーを行った」割合は全体のうち4%の構成割合を占め、この集団が目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は58%である（ノード14）。「ルームドナーを行わなかった」割合は全体のうち5%の構成割合を占め、この集団は目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は100%である（ノード15）。この差は何であろうか。ここでは、ルームドナーのように自分の資産を被災者に分け与えるかたちで支援を提供する人たちが支援活動への参加意識が高く、しかも呼び込んだ被災者によって自分の日常が変化していることから、「日常が大事」と思う割合が相対的に低いのではないだろうか。また、ルームドナーは自分の日常を変化させても被災者に手をさしのべることから、そもそも自分だけの日常を大事にしようとする集団ではなかったのかもしれない。

なお、ノード12は、被災地にボランティア活動に行った集団である。具体的な行動で支援の意思を表そうとする人たちであるが、全体のなかでの構成割合は2%と少ないものの、目の前にある日常を大事にしようと「強く思う」回答割合は100%である。自ら被災地を見たからその全員が目の前の日常を大事と思うのであろう。

遠くにいながらも震災を機に日常を大事にしようと思い、できることをしようとする意識が全体の3割近い。離れていた構成要素がある時点から結びついて同じ方向を向いている。この活動こそ疎結合関係の表れと考えら

れる。

### (3) 社会の幸福のために自分のできることを遠くから実践しようとする

**樹形図2** (138頁) は、「自分のできる支援を被災地にしようと思った」ことを重要と思う割合と「社会の幸福とは何かを考えた」割合との関係を基軸に、支援の意思の傾向を見ようとするものである。

「自分のできる支援を被災地に」するのを「強く思う」割合は全体の68%である。「社会の幸福とは何かを考えた」選択肢において、これを「強く思う」回答の構成割合は全体の53%、この集団は自分のできる支援を被災地にしようとして「強く思う」回答割合は86%である(ノード2)。この値は、社会の幸福について考えない集団のその50%(ノード3)、同じく「やや思う」集団のその49%(ノード1)に比べて35ポイント以上高い。集団の社会に対する認識の違いが具体的な行動に向かう意識に大きく影響する様子を表している。

ノード2は、前項でみた、目の前にある日常を大事にするか否かで分割され、これを大事にする集団では、自分のできる支援を被災地にしようとして「強く思う」回答割合は90%である(ノード12)。この集団は「被災地に感動した」か否かで集団が分割される。「感動した」と答えた集団の91%が自分のできる支援を被災地にしようとして「強く思う」。しかもその構成割合は39%とかなり大きい。これだけの割合の集団が、被災地への思いと主に、意識と行動の高さに結びついているのである。被災地の思いをキィとした疎結合関係が発揮されたと考えてよい。

なお、ノード3は日本社会が変化するか否かで分割されるが、これが変化すると答える者の構成割合は全体の3%である。しかしこのなかで自分のできる範囲で支援をするのを「強く思う」割合は75%となっている。少ない構成割合ではあるが、社会変化があると自らも変わる傾向がある集団の存在を示唆している。

### (4) 地域社会と個人の幸福のために自分のできる支援

**樹形図3** (140頁) は、「地域社会の人間関係の大事さ」「個人の幸福とは何かを考えた」割合との関係を基軸に、支援の意思の傾向を見ようとするものである。

樹形図3では「地域社会の人間関係が大事と思った」か否かで集団が分割され、これを大事と「強く思う」のは全体の61%の構成割合を占め、自分のできる支援をしようとして強く思った割合は78%と全体よりも10ポイント高い(ノード7)。この集団は個人の幸せを大事と思ったかどうかでさらに分割され、これを強く思う場合には、自分のできる支援をしようとして強く思った割合が88%である(ノード30)。これに対して個人の幸せを大事と「やや思う」場合のそれは64%である(ノード29)。等しく社会の人間関係を大事と受け止めても、個人の幸福をどう位置づけるかで支援活動への姿勢が24ポイント低いというように著しく異なる人々がいる。

「地域社会の人間関係が大事」と「強く思う」うえに「個人の幸せが大事」と「強く思う」集団(ノード30)は、被災地に強く感動した場合、自分のできる支援をしようとして強く思った割合は93%と全体よりも25ポイント高

い（ノード37）。その構成割合は全体の28%を占めている。遠くからでもいわゆる「災害パラダイス」の発生のように被災者への共感が行動に結びつく集団が3割近くいることを示唆している。興味深い。

なお、「地域社会の人間関係」「個人の幸福」の評価についてともにネガティブまたは積極的に答え無い集団のうち、義援金を頻繁に提供した集団がある（ノード45）。この集団はどちらかという個人を基礎に行動しているタイプであり社会で支え合うよりも自分の力を信ずる傾向があると推察される。構成割合は全体の6%であるが、それでも自分のできる支援を行おうと強く思った割合は74%と全体平均を上回る。この集団もまた、自律した個人でありながら支援行動は頻繁に行おうとするという点で、緩やかな結合関係でありながら、社会や個人の幸福への共感なしに被災地に手をさしのべる行動を取っている。疎結合の表れのひとつであろう。

#### (5) そのほか

**樹形図4**（142頁）は自分のできる支援への意向がまず「東海・東南海・南海地震が起きると思う」か否かによってどう変わるかをみている。「強く思う」と回答した割合は全体の61%（ノード2）である。このうち、被災地の人々に強く感動し、目の前にある日常が大事と強く思う集団は、自分のできる支援をしようとして「強く思う」割合が94%である。その構成割合も全体の23%となっている（ノード21）。明日は我が身と受け止めた集団なのであろう。

なお、ノード2のうち「被災地の人々に感動」したか否かで「やや思う」と答えた者の

うち、名古屋市内出身者は、自分のできる支援をしようとして「強く思う」割合が42%と、全体の平均をかなり下回る。しかし震災によって自分の意識が変わると強く思い、かつ、被災者に避難部屋を提供（ルームドナー）した集団は、全体の7%の構成割合であるものの、自分のできる支援をしようとして「強く思う」割合が100%である。（ノード44）。イベントに足を運んだ人々のなかでもきわめて意識の高い人が回答してくれたのであろう。

また、**樹形図5**（144頁）は、震災に伴って意識が変わったか否かが他の要素でどう変わるかをみようとしたものである。このうち、自分の生活は変わると強く思った構成割合は全体の39%であり（ノード2）、さらに日本社会が変化すると「強く思う」または「やや思う」構成割合は36%（ノード55）、この集団がさらに日本社会の変化を希望する割合は32%を占めている。（ノード58）。この場合、自分の意識が変わったと強く思う割合は83%である。変化に敏感であり、かつ、敏感であって欲しいという集団がこれだけの割合で存在しているのである。なお、自分の生活は変わると「やや思う」構成割合は全体の36%であり（ノード1）、さらに日本人が変化すると「やや思う」構成割合は22%（ノード59）である。この集団は、自分の意識が変わったと「やや思う」割合は69%、「強く思う」割合は31%である。全体の22%が変化は緩やかと受け止めているのであろう。

ただ、アンケート調査の概要の紹介で言及したとおり、意識の高い人がこのアンケート調査に回答したと推察される。母集団の推定と名古屋市でどうかといった応用的な知見を



得るのは、今後の課題としたい。

このような課題がありながらも、問題意識が高いと考えられる回答者の全体の3割前後では離れていても自分のできる支援を実践しようとし、震災を機に意識が変化した集団があることを明確に示唆した。地理的には離れた生活を持つ人々が、震災を機に新たな協力支援関係を行おうとしている。疎結合関係の存在とその機能が推定できる例と考える。

#### 4 支援事例2：近くからの支援「岩手県花巻市笹間地区水田農業再生ビジョン」

「1 はじめに」で断ったとおり、渡辺2011で掲げた岩手県花巻市の笹間地区水田農業再生ビジョンについてより詳細に紹介する。以下の1)～4)の内容は現地での聞き取り調査による<sup>(注11)</sup>。

この構想は、笹間地区1500haの水田農業地帯の今後のありかたを構想するビジョンである。本年2月、この構想の青写真が提案された2月半ばには、その要旨が日本農業新聞でも報道された(2月18日 朝刊一面)。本稿で紹介するのは、その後の5ヶ月の検討をくわえ、さらに震災への対応という観点からビジョンの位置づけを再評価したものである。

##### 1) ビジョンの概要

笹間地区の1500haの農地を1経営体あたり30ha規模の経営体50箇によって経営する。30ha規模の経営体は二人の専従者によって担われ、年間1200万円の当期利益を計上できる経営とする。1200万円の内訳は、600万円が地代、600万円が人件費である。人件費は、

二人の専従者の雇用労賃を予定している。

専従者二人のうち、一人は60歳以下の基幹的な作業担い手であり、もう一人は60歳以上の労働者である。月々順に30万・20万円の給料を払う。年間を通じてあわせて600万円を予定する。ボーナスは経営成果を上げることによって分配可能とする。すなわち、経営努力を引き出す誘因を設定した。

地代は、10aあたり2万円を原則とする。うち15万円が純粋な地代、0.5万円が畔の草刈り費である。畔の草刈りは地主に行ってもらい、その手当として支払う。草刈りまで専従者二人が担当すると、ほぼ間違いなく倒れてしまうのが経験上分かっているための措置である。

30ha規模の経営体は机上論ではない。実践例がある。現在実践している30ha規模の経営体の経営モデルは、主食用米15ha、飼料用米3ha、小麦大豆雑穀12haである。これを8戸の農家で構成している。8戸の農家が高齢化でリタイヤする前に、2人の担い手を育成する。これによって地域農業の生き残りを図る。

##### 2) 地域内資源配分の機能

###### (1) 共助の活動

日本の農村社会は労働共同体である。だから地域の皆が何らかの形で農業に参画する必要がある。草刈りを地主が行うのも経営問題に加えてモラルの問題でもある。

###### (2) 女性・高齢者が担うビジネスシーンの創出

女性と高齢者の出番を作りたい。従って、地域内に、農産物の直売・加工・園芸といっ

た付加価値を高める事業を立ち上げるほか、より複合的なサービスの提供ともいえる農泊にも射程を置く。

### (3) 県内資源循環

飼料用米の肥料は鶏糞等を用いる予定である。この鶏糞等は、二戸など岩手県内の酪農地帯で排せつ物が余剰状態となり環境に負担を与えている地域から融通する。こうして岩手県内の資源循環を実現しようとする。

## 3) ビジョンの目的

### (1) 地域水田ビジョンのその2のバージョン

平成15年から行っていた花巻農協（当時）の地域水田農業ビジョンが第1回地域水田農業ビジョン大賞農林水産大臣賞（平成16年）（全中主催、農林水産省後援）として選ばれた際、審査委員代表の今村奈良臣先生の審査講評は、「農業関係者の賞は、受賞時がピークであとは衰退するかやめているのがほとんど」というものであった。この言葉に発奮して、今回のビジョンが作成されている。

### (2) TPP対策

水田農業の地に足のついたビジョンを示すのが狙いである。ビジョンのないところに論争はない。しかもこれを実効性の高いもので提案している。モデルとなる経営体の決算の実績もあり机上論ではない。TPPの議論がかまびすしく、参加反対を唱える農業界への批判の一つは、対案もなく将来像もなく旧来の状態を維持するために反対しているというものであった。このビジョンを提起することで、実現可能性の高い水田農業の将来像を示すことができる。

### (3) 震災対策

内陸から被災地を応援する。花巻農協は3度の合併を経てその管内に沿岸部の釜石市・大槌町も含む。津波被害で流された地域において、その地域の人をあたかも邪魔にするような大規模施設を単に造るだけではなく、その地域の人々が核となって復興できるモデルとして本案を提案している。

### (4) 農協の支店の再評価

地域農業の再生は、市の単位では広すぎて難しい。旧村単位が最適である。これより狭い区画は地域農業とは言えない。旧村単位ならば、その領域の土の状態をよく知った人がまだ存命である。この人たちのノウハウを生かして地域農業の経営を行う。このために、旧村単位で設立された農協の支店が司令塔として最適と考えられる。ただし、土壤改良による土の状態の記録と経営の記帳代行などの事務処理は、農協の支店が行う。各経営体で共通の事務処理も多く、支店で一括して行ったほうが効率的かつ現実的である。

(5) 耕畜連携と6次産業化を地域内で展開する。点でもクラスターでもなく面として地域経営をとらえる。

## 4) 特色

本ビジョンは東日本の水田農業のモデルになりうる。花巻市は積雪地域なので、経営規模で30haは必要という経験的な実績がある。集落営農の普及地域である西日本なら、2毛作ができるからおそらく20haでも十分と考えられる。これもまた集落単位の運営となろう。

## 5) 部分最適と全体最適

いわて花巻農協が釜石地域を管内に抱えることについて2点補足しておく。

1点目は、部分最適と全体最適の観点からこのビジョンの意義をくみ取ることである。すでに示したようにいわて花巻農協は雪深い内陸の西和賀町から沿岸の釜石市までを管轄する農協となった。その釜石市は新日鉄の高炉が閉鎖された後、市に十分な雇用機会がなく若年層が流出し、ピーク時（1963年）には9万人を超えた人口も2010年には4万人以下にまで減った。日本の都市の20年後の姿とされるが、それでも近年では新たな製造業の復活の兆しがみられていた。このため、都市の「過疎対策」のモデルになりうるとして政官学各界から注目されていた。例えば学界では、玄田有史氏を中心として釜石の地域研究を通じて樹立された希望学（玄田ほか2009など）がある。希望学では、戦前に被った2度の津波と戦時中の艦砲射撃・戦後の鉄鋼所閉鎖という苦難を町の人々が乗り越えていく様子から、地域の誇りを保持しながら明るく生きていくための要件が検討されている。この研究は、近年、政権政党の都市部対策として、従来農村部に手当てされてきた過疎対策予算を都市に振り向けるための世論形成にも預かって力があつた。

東京・霞ヶ関では、高齢化対策は農村か都市かをめぐって綱引きが行われ、予算配分において研究者の活動はそれぞれの主張を代弁するいわば対立の構造を形成するもののひとつとして扱われることがある。玄田氏の研究は近年急速に浮上した都市の過疎対策を訴える代表的なものの一つである。こうした背景

もあり、震災で生き残った者たちの、震災で亡くなった人たちへの責務の感情をもとに、小異を捨てて団結し政治の大同団結を訴え、あわせて復興のための財源を消費税率アップに結び付ける玄田氏の主張（読売新聞3月21日朝刊）は、その理念の実行プロセスに官学的色彩の強さを指摘され批判の対象となったりする（例えば酒井2011）。

しかし現地に行ってみれば、そんなふうには東京で演出されてきた舞台に拘泥せず、農村部・都市部ともにそれぞれが可能な限りの支援の手を被災地にさしのべる気持ちにあふれている。予算獲得の便法も多少はあるのかもしれないが、代表的なふたつの意見があるに過ぎないものをあえて対立の構図に仕立てるといった、およそ現地からかけ離れたシナリオが、むしろ現地の人々の失笑を買い、あるいはそんな論争のエネルギーがあるなら被災地で泥籠を担ぐなど単純労働でも行って汗を流してくれと行った素朴で真摯な感想につながっている<sup>(注12)</sup>。つまりは、全体の状況をつくる力学が必ずしも部分の最適を反映していない。部分最適が全体最適を満たさないのは経済学においてゲーム理論が明らかにした画期的な業績である。その要件は広範に研究されており、これを活用・回避するための制度設計の選択肢も事例に応じて多数検討されている。被災地支援にあっても同様の観点からの再検討が必要であろう。

2点目は、疎結合関係が認められるとき、より大きな目的のために地域の部分最適を全体最適に導くことのできる可能性が高まることである。本節で示した笹間地区水田農業ビジョンは、地区の中での構成員の独立性を尊

重しつ地区全体の繁栄に貢献するためにはほすべての構成要素が何らかの形で役割分担することを提唱する。地区内での緩やかな結合関係の結集による地区全体の機能向上を図っている。さらには、岩手県内での裁定取引による資源配分の適正化を目指す。それぞれの地区の独立した構成要素（農場）の緩やかな結びつきにより県全体での効率的かつ合理的な農業経営を計画する。重疊的な疎結合関係である。こうして、笹間地区の水田農業の将来を確かなものにするのみならず、同じ農協管内の被災地の復興にあっても、岩手県全体の農業再建にあっても、TPPへの対応という国家的対応にあっても、ともに地に足のついた対策を提案している。

聞き取り調査の際、どうして震災の支援策としてこの集落営農構想を立てたのか、という質問に対し、「その時その時にできることをしているのみ」という答えがビジョンの立案者から返ってきた。状況の要請に適宜応えている結果、活動の効果が被災地にまで及ぶ構想が生まれてきたのであろう。何よりも日常の復旧を前提にしているからこそ、その地域の人の全員参加を実現しつつ永続的かつ効率的な生産基盤を整えようとしている。この事例を構成要素の日常の維持を目的とした疎結合関係による豊かな成果と評価する観点があってもよい。

## 5 オーレスンの大火と復興

北欧の資源国ノルウェーにオーレスンという人口4万人弱の港町がある。このたびノルウェーに短い滞在をしたが、その際、是非とも訪問したいと考えていた。いわゆる「災害

資本主義」があったのではないかと推察していたからである。

オーレスンは、1904年1月23日の大火により16時間で850軒もの家が焼失し、1万人もの人々が焼け出されたと記録されている。しかし地域住民の発奮と内外の助力によって1907年には街の中心が再建された。再建にあたってはもちろん防火造の設計が施されている。しかもこれらの建築はアール・ヌーヴォー調のもので統一された。いまではオーレスンはこの美しい街並みでよく知られている。この復興のデザインが、あまりにシステムティックな施工であったため、いわゆる「災害資本主義」的な要素があったのではないかと疑った。「日常の復旧」を後回しにして観光もターゲットにした町並みの再設計が行われたのではないかと考えたのである。

実際のところそのようなものではなかった。

まず、日常の復興でという点であるが、短い時間で延焼により町の建築物の大半が焼失した理由は、そもそも建築群の密集にあった。オーレスン博物館の大火前の写真（写真5）に見られるように、極めて貴重な土地を効率的に利用するため、建物はもともと稠密に隣接して建築されていた。従って大火後に再建された建築群も同様に密集して建てられているが、それはまず大火前の日常の用途の復活を目的としていたのである。

アール・ヌーヴォー調のデザインで統一されたのには、まったく異なる理由があった。ノルウェー王国の独立である。ノルウェーは1387年以来同君連合の形で長らくデンマークの支配下にあった。その後ナポレオン戦争でデンマークが敗れると、ノルウェーはスウエ

#### 写真4



\*2011年7月のオーレスン 大火直後のオーレスン(写真6)とほぼ同じ角度から著者撮影

#### 写真5



\*大火前のオーレスンの町並み  
\*オーレスン博物館の資料から著者収集

#### 写真6



\*1904年の大火直後のオーレスン  
\*オーレスン博物館の資料から著者収集

ーデンに割譲された(1814年キール条約)。この際のノルウェーによる民族自決のための独立運動をスウェーデンは認めなかった。スウェーデン=ノルウェーも同君連合であった

が、前者の一般法が後者では憲法として適用されるなど、ノルウェーにとっては十分な自治とはいえなかった。ノルウェーの独立と民族自決は1905年になって国会で圧倒的多数で決議され、軍事的衝突の危機を乗り越えて実現した。この独立を祝い、また、内外にその存在を宣言するのに、オーレスンはアールヌーボー様式で豊かに飾られたのである。

オーレスンアールヌーボー美術館では町の歴史を示す資料が収蔵されており、映像を用いた資料コーナーでは「大火にあって美しい街に生まれ変わってよかった」という高齢女性の言葉でビデオは終わっている。いわゆる「災害資本主義」ではなく、独立と平和をしみじみと訴える声と受け止めるべきものであった<sup>(注13)</sup>。

この場合の「日常の復旧」は、大火前の生活の復旧に加えて、独立と民族自決を勝ち取って得た輝かしい「日常」であった。これを「復興」と呼ぶなら、まさにその時代の国民全体で共有できる目的や願いがその背景になければならないと考える。

## 6 おわりに

### 1) より大きな目的と利他性による共済加入

本稿では、東日本大震災の被災地が被害を乗り越えて復旧しようとする状況に対して、遠くから行われた名古屋の支援イベントと、近隣内陸から行われた地域農業再生ビジョンの提案のふたつの事例を紹介し、「日常の復旧」のために、構成要素の緩やかな結合関係がより強く結び付いて、可能な範囲で支援の手を差し伸べようとする状況を示した。また、オーレスンの大火からの復活が、いわゆ

る「災害資本主義」ではなく「日常の復旧」のうえに国民の悲願の達成のシンボルとして行われたことを述べた。より大きな目的があったのである。

いつものように共済事業の意義を再掲したい。より大きな目的のためにいま自分でできることを行う仕組みが共済であった。このような発想での加入だからこそ、加入者は、この事業をつくる、あるいは事業量を伸ばすと思って加入などしていない。単に相手のために入るという利他性のみである。

復興計画に欠かせないものは、「単なるビジョン」ではなく、日常を取り戻す、そしてさらにより大きな目的のために資源を結集する、そのためのプロセスを具体化する枠組みなのだろう。ビジョンはまず「日常の復旧」であり、そのうえに新たな構想を載せるとの位置付けがほしい。それが復興なのだと考える。復興の担い手はまず地域の人々である。もちろん、被災地における決定的な資本不足を埋めるために、巨大資本の参入の誘因を0とすることには必ずしも賛成しない。しかしその参入は、あくまで被災者が納得するより大きな目的に沿った場合のみではないかと考える。そしてそのより大きな目的は、オーレスンの大火後にみられた「国家の独立とその祝福」に匹敵するようなものであるべきではないか。誤解のないように付け加えるが、「より大きな目的」は、被災者の日常を踏みにじるものではなく、共済の加入目的と同様、被災者の日常を質的により豊かにするものでなければならない。

震災復興への直接支援という観点からみると社会科学系の調査研究にできることは自然

科学系のそれに比べて相対的に限られると理解している<sup>(注14)</sup>。それゆえここでは、次項でレベッカ・ソルニットの言葉を拙い私見の代わりに引用し、その含意を本稿に即して解釈したものを述べる。最終項では名古屋の支援イベントで記入された被災者へのメッセージのいくつかを掲げて一時的に本稿を終える。

## 2) レベッカ・ソルニットの言葉と「日常」の進化

レベッカ・ソルニットはあるビジネス誌のインタビューに答えて次のように述べている。「災害の際に見せる人間の姿が人間の本質だとすれば、その発露を阻む日常は、別のかたちの災害ではないのか。是非考えてもらいたい。」<sup>(注15)</sup>

だからこそ、まず「日常を復旧させよう」として勝ち得た新たな「日常」は、これを取り戻すための著しい努力の経過があるゆえに、ある意味「人間の本質」の「発露」を促す仕組みを社会に組み込むことができるようになるのではないかととらえている。例えば大水害ののちに防災意識を核に生まれた川根振興協議会（小田切2010）は、そのモデルといってもよい。フィリピンの「ピナツボ・アエタ先住民」は、ピナツボ火山の大被害を乗り越える過程で、従来ほとんど交流のなかったこの地域の多数の部族のなかに、異なる方言と居住地区を超えて共なる意識と組織が形成された地域集団である（清水2010）。この地域集団が世界中から来る支援の受け皿となって地域の復興をリードする。復旧後の「日常」もこのような社会変化の要素を入れて変わるのである。

そして、被災地から離れた所でも、名古屋市で行ったアンケート調査結果が示すように、自分の意識も生活も地域社会を見る目も変わるという人々が少なからず存在したのである。アンケート調査においてかなりの割合で個人と社会の変化の可能性を聞いたのは、この趣旨の検証でもあった。

「復旧」のうえでの「復興」をめざすという主張には、被災地とそれを見つめる地域双方において、「他への慈愛」を代表とする「人の本質」の発露を円滑化する社会に変えていくという含意があることを指摘しておく。

### 3) 名古屋の支援イベントのアンケートから：被災者に向けたメッセージ

- ・私達のできる事は少ししかないけど少しでも役に立てるようにがんばります。
- ・私たちにできることを、できるかぎりやりたいと思っています。いつかきっと笑える時が来ると信じています。東北だけでなく、日本全体で一緒にがんばりましょう！！
- ・がんばらなくていいから 明日があるのはみなさんのおかげだから 周りの私たちががんばりますから！！！！
- ・必ず立ち上がれると信じています。出来る範囲で力添えます。
- ・甘えて下さい！！
- ・一言が見つかりません。
- ・一日でも早く通常の生活に戻れるよう祈っています。
- ・現地へ行ってのお手伝いはできませんがいつも忘れることなく思っています。
- ・悲しい時うれしい時も一緒。
- ・福島産のものを今後も買う。

- ・陽はまた昇る！！
- ・自分がもし同じようなことを起したらと考えなおされました。一緒にがんばりましょう。
- ・若い世代に希望をもって子孫に伝えてほしい。
- ・決して忘れません。新しい日本を築いていきましょう！！学生さんたちサイコー。
- ・私の祖父は陸前高田で災害に会いましたが福島の方これから大変ですがガンバッテ下さい。
- ・疲れた時は無理をせず少しづつ歩んで下さい。物産展たのしみにしています。
- ・今すぐ、そして直接的な支援は出来ないかもしれませんが、時間のかかるであろう今回の事。間接的であれ、後日であれ、必ず皆様の為になるコトをこれからも続けます。
- ・強さに感動しました。
- ・皆さんは孤立していません。私もがんばります。
- ・東北のトマト買いました。美味しかったです。これから大変なこともたくさんあると思いますが、一緒に頑張りましょう。
- ・皆さんの我慢に感謝し、きっと日本を変える。
- ・皆さんと共にあると思っています。
- ・思い出になること。
- ・一人じゃないからみんなで支援します。必ずたちなおりますから。
- ・いつか陽の当る日が来ると思います。
- ・地名に福という字が付いているから、またいい時代が来ると思います。
- ・必ずそばに「人」がいます。助け合いましょう。
- ・名古屋の地でできることをやっていきたいと思えます。
- ・あなたが悪いのではない。
- ・現地に行ってきました。国の無策を感じた。
- ・被災地の方々を見て人のあたたかさを感じました。

- ・頑張ってください。見えない物を信じるのは難しいですが信じる事に意味があるのです。
- ・ほんとに応援してます。できることはやっています頑張らしましょう！！
- ・ありきたりですけど応援してます。頑張らましょう！
- ・がんばれとはいいません、1日1日を大切に。
- ・頑張るすぎないで！周りを頼って下さい。
- ・応援しています。
- ・風評被害に負けないで！全国から応援しています。
- ・少しでも早く復興するように協力します。頑張ってください。
- ・私たち東海地方も起こりうる事で福島、東北の方々のがんばり、耐える事、学びました。明るい日が来ると思います。応援しています。

以上

注

- 注1 渡辺2011で示した通り、ルース・カップリングによる組織分析の観点、永木正和筑波大学名誉教授の問題意識を契機としている。なお、我が国でもこの概念は早くから注目されていた（田中1981）。教育組織に関連した解説としては、村田1985がある。
- 注2 日本農業土木学会・建築学会の主流をなす議論など。関連して、復興で描く新しい未来に関する多くのシンポジウムも行われた。
- 注3 この実現のために、地域・関係者との徹底した話し合いがその要件に付されている。
- 注4 例えば、竹中平蔵 信濃毎日新聞2011.4.22、AERA増刊2011年4月号。
- 注5 福田1926、青田2010から再引用。
- 注6 Disaster Capitalism (Naomi Klein 2007)。「災害資本主義」は、ナオミ・クライン2005の星川訳による。なお、岩波書店ではこれを「惨事便乗型資本主義」とした訳書を9月8日に出版する予定である。[http://www.iwanami.co.jp/topics/index\\_i.html](http://www.iwanami.co.jp/topics/index_i.html) 21000818（幾島幸子、村上由見子訳『ショック・ドクトリン 上・下 - 惨事便乗型資本主義の正体を暴く』）
- 注7 農産物に関する震災支援に関連したイベントは、農水省の下記サイトを参照。<http://www.maff.go.jp/j/soushoku/eat/riyo.html>
- 注8 毎日新聞の記事（部分）を例として掲げる。

「東日本大震災：風評被害を受けた野菜を22日販売 - 名古屋 / 愛知

福島第1原発事故で風評被害を受けている東北・北関東産の野菜を販売する「5・22福島原発農産物風評被害に勝つぞ IN 名古屋」が22日、名古屋市東区のアアシス21で開かれる。日本福祉大の学生で作る実行委員会が主催し学生約130人が運営。全農と愛知、福島のJAが後援する。

同大経済学部の佐藤皓一教授が元JA職員で、ゼミ学生らが風評被害を受けている人たちのために名古屋で何かできないか考え、継続支援の出発点として名古屋中心部でのイベントを企画した。

福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉産の野菜・果物19品目約300キロを販売予定。JA福島中央会が作成した農業被害の実態を訴えるパネルも展示する。会場近くでは支援カンパも行き、原発事故の影響を受けている社会福祉法人などへの指定寄付として福島県社会福祉協議会に送る。」

（以下略）

注9 調査結果の詳細は農協共済総合研究所2011を参照。

注10 実害のあるものはともかくとして、風評被害の状況は今（8月）も変わっていない。農産物だけではなく市民生活にも及んでいる。例えば福島ナンバーの自動車が県外にあると、ただそれだけで何者かによって傷つけられることが頻発している。このため、福島の一部のレンタカー会社は、すべて会津ナンバー車に変更したりしている。

注11 鳥喰営農組合の大和組合長からの聞き取り調査による。

注12 小職の行った宮城県・岩手県の現地調査による。

注13 ノルウェーは第2次大戦でナチスドイツの支配下にあった。その傷跡は深く、ノルウェーの比較的大きな町では「ドイツ占領下のノルウェー」の様子の記録が数多く残されている。世界遺産となったノルウェーのフィヨルドは、観光資源としても見事であるが、ごくわずかな開墾地に酪農が営まれていた。酪農家のそばには道はもちろんアンテナがある。自国領土を守るための措置なのであろう。

注14 自然科学系の研究者の活動が直接の支援の手立てになる分野が多いと考えているからである。例えば、児玉龍彦氏の活動のように。（放射線の健康への影響について（児玉龍彦教授国会発言））([http://blog.goo.ne.jp/tomorrow\\_2011/e/8f7f0d5f9d925ebfe7c57aa544efd862\\_20110815](http://blog.goo.ne.jp/tomorrow_2011/e/8f7f0d5f9d925ebfe7c57aa544efd862_20110815))。あるいは、小松秀樹医師による、いわき市の透析患者の搬送活動もある（後方搬送は負け戦の撤退作戦に似ている：混乱するのが当たり前 亀田総合病院 小松秀樹 [http://kodomo-kenkou.com/shinsai/info/show/608\\_110829](http://kodomo-kenkou.com/shinsai/info/show/608_110829)）。

なお、もちろん、社会科学系の研究者が全く無力と言っているのではない。被災地にある大学では復興に関して何ができるかを真剣に検討し、被災の経験を社会制度やコミュニティのあり方も含めた広い知識に高めて次の不測の事態に備えようとするなど、活発な提言が行われている。例えば川村2011は、個人商店の果たした役割を積極的に評価し、量販店と個人商店の平時と緊急時の役割分担の論点を整理している。被災地だからこそできる説得力のある研究であろう。

私見だが、調査研究には、区切りはあっても完成がないことを肝に銘じて今に至る（おそらく調査研究だけではな



いだろう)。未完成であることを承知でこれに区切りをつけ世に問うには研究の全貌を見通す中長期的視点が不可欠である。しかしこの視点はもちろん成果の「実践性」ないし「即効性」と必ずしも相いれない。その結果、このような研究の場合は大災害に直面した場合の具体的な支援の手立ては著しく限られる。大災害に直面しても具体的な支援のための力量も言葉もない。祈ることしかできない自分がある。小生の主張は、自分が安全圏にいながら原発の当事者を単に批判したり、震災をあたかもネタにして被災地や復興政策の「夢物語」を披露することは、見るに堪えないという趣旨でもある。あわせて、宗教学者山折哲雄氏は震災の復興計画に関して次のように述べていることを紹介しておく。「立ち直りそうな人には黙って遠くから人や金、物を支援すればいい。問題は自立する気持ちすら起きない人です。言葉は無力です。そばに寄り添って祈るしかない。悲しみを共有できない負い目を背負う以外ないじゃないですか。そこが復興計画の原点です。」(2011年6月28日 朝日新聞 朝刊 山形全県・2地方)。

注15 2011年6月23日(ダイヤモンド・オンライン) <http://diamond.jp/articles/-/12839?page=8> 20110815

- ・青田良介2010「被災者支援にかかる災害復興基金と義援金の役割に関する考察」『災害復興研究』第3号
- ・福田徳三1924『復興経済の原理及若干問題』同文館
- ・川村保2011「震災後の食料供給における個人商店の役割－仙台市内での経験より」『2011年度 日本フードシステム学会大会報告要旨集』日本フードシステム学会
- ・村田俊明. 1985「学校経営のためのルース・カップリング論について」『学校経営研究』第10巻。
- ・ナオミ・クライン2005 星川淳訳(作家・翻訳家/TUP)「新しい植民地主義 台頭する災害資本主義」『世界』742号 岩波書店
- ・Naomi Klein 2007 *The Shock Doctrine: the Rise of Disaster Capitalism*. Metropolitan Books.
- ・農協共済総合研究所2011「来訪者意向調査結果報告書：5・22福島原発農産物風評被害に勝つぞ IN 名古屋」(近刊)
- ・小田切徳美2011「災害資本主義」平成23年7月18日町村週報第2767号 全国町村会

#### 資料1 コラムー災害資本主義 明治大学教授 小田切徳美

多くの犠牲者を出し、未だに復旧の目処が立たない地域を残す東日本大震災と原発事故は、英語では「ディザスター」(災害・惨事)という言葉で表現されている。

筆者は現在、英国北部の小さな町に滞在しているが、この言葉を当地の人々からしばしば聞く。もちろん、日本の被災者と被災地を心配する問いかけの中においてである。今回の事態は3月11日当日から、海外でも驚くほど詳細に報道されている。そのため、この町の人々の日本へのまなざしは、「この悲しみを乗り越えて」という温かさに溢れている。

しかし、実は、筆者はこの言葉に接する度に、別の象徴的な用語を連想してしまっている。「ディザスター・キャピタリズム」(災害資本主義)である。これは、数年前に出版され、日本国内でも話題となっていた書籍、ナオミ・クライン『ショック・ドクトリンー災害資本主義の台頭ー』で使われた言葉である。この本は、自然災害やクーデター、戦争等による惨事により人々が放心状態になってしまった時、資本主義は今までおよそ不可能と思われた過激な市場主義的な改革を実現しながら「再生」することを明らかにし、欧米圏ではベストセラーとなっている。

日本から聞こえてくる、「これを機会に広域特区や道州制を」「この状況からの再起の切り札としてTPPへの参加を」「日本再生のために大胆な消費税の増税を」という議論に接する時に、この本が災害後の日本の状況を参考にして書かれたのではないかという錯覚さえ感じてしまう。なぜならば、これらは規制緩和(特区)、関税撤廃(TPP)、企業減税(消費税増税との交換)の3点セットにより、グローバル企業にとって好都合な日本社会に変える議論として、平時であれば、いま以上に喧々譁々の議論となっているに違いないからである。

こうした潮流に共通するのは、肝心の被災地・被災者の視点からの改革論が徹底的に欠落していることであり、時にはそれを糊塗するように、「創造的〇〇」「革新的〇〇」などという美辞麗句に飾られている場合も少なくない。海外からの温かなまなざしとは別次元で進む日本での「災害資本主義」。これが、日本からしばらく離れているゆえの筆者の誤解であることを切に願っている。(町村週報第2767号(平成23年7月18日)から許可を得て転載)

- ・小田切徳美2010「最近の農村政策の動向と背景」『共済総合研究』第59号
- ・酒井直樹2011「無責任の体系」三たび『現代思想』Vol. 39-7
- ・清水展2010「大災害の後に地域と民族が出現したーピナトゥボ山大噴火後の環境と生活の激変と地域研究考」『シーダー SEEDer 3号ー地域環境情報から考える地球の未来』シーダー編集委員会
- ・田中政光「ルース・カップリングの理論」『組織科学』第15巻第2号, 1981年59-75頁等。
- ・レベッカ ソルニット (著), 高月 園子 (訳): 2010『災害ユートピア なぜその時特別な共同体が立ち上がる

- か』亜紀書房。(Rebecca Solnit, 2009 *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*, Viking Adult.
- ・東大社研・玄田有史・中村尚史編2009『希望学3 希望をつなぐー釜石からみた地域社会の未来』東京大学出版会
- ・渡辺靖仁2011「農家の経営リスク観と保障需要」『共済総合研究』農協共済総合研究所Vol. 62.
- ・Weik, K. E. "Educational Organizations as Loosely Coupled System" *Administrative Science Quarterly*, Vol. 21, 1976

## 資料2 支援イベント趣意書

### ■5・22福島原発農産物風評被害に勝つぞ IN 名古屋

東日本震災にともなう原発放射能汚染の影響は福島県をはじめとする東関東の第一次産業を直撃し崩壊寸前の状況に追い込んでいます。小額な年金と農産物・漁業の現金収入によって生活が維持されてきた農・漁村の生活が突然崩壊する事態となりました。

私たちは、福島県人に対する宿泊拒否や農・畜産物の風評被害に心を痛み、名古屋で何か支援ができないかを話し合ってきました。現地にボランティアとして支援活動を行うことも多くの学生から声が上がりましたが、あえて名古屋開催のこだわったのは東日本震災の被害を名古屋市民と共有しながら「一人ひとりが何をすべきか」を考えたいからです。

全国的な支援の取り組みも活発に行われていますが、支援の必要性は長期にわたることが予想されることから一時的な支援でなく継続した支援を行うためには、名古屋でできる手作りの支援活動が重要と考え、その出発点としてイベントを計画しました。

今回の取り組みを通して福島の農業支援をするとともに災害に対する考え方、支援方法等の経験を積み重ね、誰でも何時でも様々な支援活動に参加・立案できる能力を得たいと考えています。

#### 記

#### 1. 活動内容

福島産農産物の販売および支援呼びかけ・カンパ活動

#### 2. 日時・場所

名古屋市栄 「オアシス21」 5月22日(日) 午前9時~午後4時

#### 3. 主催

「5・22福島原発農産物風評被害に勝つぞ IN 名古屋」日本福祉大学実行委員会  
(ゼミナール・サークル) 代表 ○○○○(3年生)

事務局 日本福祉大学 経済学部 佐藤皓一ゼミ(研究室)(内線6106)

#### 4. 後援

J A あいちグループ(中央会、信連、経済連、共済連、厚生連)

J A 福島県グループ(同上)

全国農業協同組合連合会

#### 5. 協力・支援

名古屋在住の音楽集団「ヤボネシア」等

農協共済総合研究所

資料3 支援イベントの調査票と単純集計結果

◆ご来場の皆様へのアンケート◆

(選択肢の値は、断りのない限り回答結果の301名を母数とした割合(%))

ご来場ありがとうございます。  
アンケート調査にご協力をお願いします。

5・22 福島原発農産物風評被害に勝つぞ IN 名古屋 事務局

1 あなたご自身のことを教えていただけますか (該当するものに○印)

- 1) 性別 (1) 男 32.6 (2) 女 63.8 n.a 3.7
- 2) 年齢 (1) 10代 13.3 (2) 20代 14.0 (3) 30代 15.0 (4) 40代 19.3 (5) 50代 16.3 (6) 60代 10.3 (7) 70代以上 10.0 n.a 2.0
- 3) 職業 (1) 会社員 24.3 (2) 公務員 4.3 (3) 自営業・会社経営 5.6 (4) 自営業・農業 1.3 (5) 自由業 1.3 (6) 主婦・主夫 20.6 (7) 家事手伝い 0.7 (8) パート・アルバイト 10.6 (9) 学生 17.9 (10) 無職 6.6 (11) その他 3.7 n.a 3.0
- 4) 本日の訪問の同行者 (1) 夫婦で来た 19.9 (2) 子供と来た 9.6 (3) 友人と来た 29.6 (4) 一人で来た 35.2 n.a 5.7
- 5) あなたのお住まいの地域はどこですか。 (1) 名古屋市内 56.1 (2) 名古屋近郊 13.6 (3) 名古屋市以外の県内 18.9 (4) 愛知県外 8.0

2 このイベントをどこで知りましたか? (いくつでも該当するものに○印)

- 1) オアシス21のホームページ 3.7
- 2) 新聞記事・テレビ 16.3
- 3) 友人・知人からの口コミ 17.6
- 4) 街を歩いていて偶然 55.1
- 5) 週末は必ずこの場所に来る 1.7
- 6) そのほか(具体的に ) 1.7

3 このイベントで印象に残ったものは?

(以下、それぞれについて3択から一つ○印)	強く残った	やや残った	残らなかった	
1) 被災地の農産物	72.4	17.6	0.7	n.a 9.3
2) 音楽グループのステージ	31.6	30.6	12.6	n.a 25.2
3) イベントを運営する学生のがんばり	68.4	16.3	1.3	n.a 14.0
4) 被災地の農産物の購買に参加する名古屋市民の姿	29.2	30.2	7.3	n.a 33.2
5) そのほか(よろしければ具体的に )				

4 このようなイベントを今後開催することについてどうお考えですか

	強く思う	やや思う	思わない	
1) この規模で、継続したほうがよい	71.1	21.6	2.0	n.a 5.3
2) 継続したほうがよいが、もっと小規模でよい	19.9	22.3	29.6	n.a 28.2
3) イベントによらない支援策を別に考えるべきである	18.6	25.9	25.2	n.a 30.2

5 あなたが東日本大震災で感じたことを教えていただけますか

	強く考えた	やや考えた	考えなかった	
1) 個人の幸せとは何かを考えた	47.5	29.9	3.7	n.a 18.9
2) 社会の幸福とは何かを考えた	53.5	24.3	4.7	n.a 17.6
3) 自分のできる支援を被災地にしようと思った	68.1	19.9	0.7	n.a 11.3
4) 今日の前にある日常を大事にしようと思った	62.1	20.6	0.3	n.a 16.9
5) 節電しようと思った	58.5	23.9	4.0	n.a 13.6
6) 家族を大事にしようと思った	60.5	19.6	0.7	n.a 19.3
7) 友人との関係が大事と思った	55.1	21.3	3.3	n.a 20.3
8) 地域社会の人間関係が大事と思った	61.5	19.6	2.3	n.a 16.6
9) お金はかかっても、いざという時のために備えるべきと思った	43.2	33.6	3.7	n.a 19.6
10) 自分が被災していないことに安堵した	33.6	35.9	9.6	n.a 20.9
11) 被災地のかたがたに感動した	48.8	27.6	2.7	n.a 20.9
12) お金が大事と思った	30.2	33.9	6.0	n.a 29.9
13) そのほか( )				

6 5で3)と答えた方へ

具体的にどのような支援を被災地に行いましたか (いくつでも)	頻繁に行った	行った	行わなかった	
1) 祈った	39.2	24.6	10.3	n.a 25.9
2) 被災地の農産物を買った	27.9	36.2	13.3	n.a 22.6
3) 被災地にボランティア活動に行った	5.0	12.6	50.8	n.a 31.6
4) 被災地の避難民に部屋を貸した	3.7	5.0	57.1	n.a 34.2
5) 被災地に本や不足物資を送った	16.3	9.0	46.5	n.a 28.2
6) 義援金を出した	45.2	28.9	10.6	n.a 15.3
7) 義援金付きサービスを選んだ	23.6	25.9	20.9	n.a 29.6
8) 地域で被災地に対する支援活動に協力した (募金やイベントなど)	24.6	25.2	13.3	n.a 36.9
9) そのほか (具体的に )				

7 この震災による変化をどうお考えですか

	強く思う	やや思う	思わない	
1) あなた自身の意識が変わると思う	52.8	28.6	2.3	n.a 16.3
2) あなたの生活が変わると思う	39.2	35.9	4.3	n.a 20.6
3) 日本人が変わると思う	42.2	34.9	4.7	n.a 18.3
4) 日本社会が変わると思う	48.8	26.6	6.3	n.a 18.3
5) 日本社会が変わってほしいと思う	55.8	21.6	1.3	n.a 21.3
6) そのほか (具体的に )				

8 7でもし変わるとお考えの場合、どのように変わるかを自由にご記入ください

( )

9 今後想定される東海・東南海・南海地震をどうお考えですか

	強く思う	やや思う	思わない	
1) 東海・東南海・南海地震が起きると思う	60.5	29.9	3.7	n.a 5.6
2) 9で「強く強く思う」「やや思う」と答えた人へ	具体的対応済	これから	特にしていない	
①具体的な対応をしている	22.4	58.1	19.5	(236名中)
3) 9で「思わない」と答えた人	発生を信じない	生存中は不発生	その他	
①報道は地震が来ると言っているがそう思わない	41.5	43.9	14.6	(41名中)

10 原発についてどう感じていますか

	強く思う	やや思う	思わない	
1) 事故の情報管理が問題	62.1	21.6	1.0	n.a 15.3
2) リスクが高いので推進すべきではない	32.9	34.2	9.3	n.a 23.6
3) リスクに応じた安全対策を行ったうえで推進すべき	39.2	25.2	6.6	n.a 28.9
4) そのほか ( )				

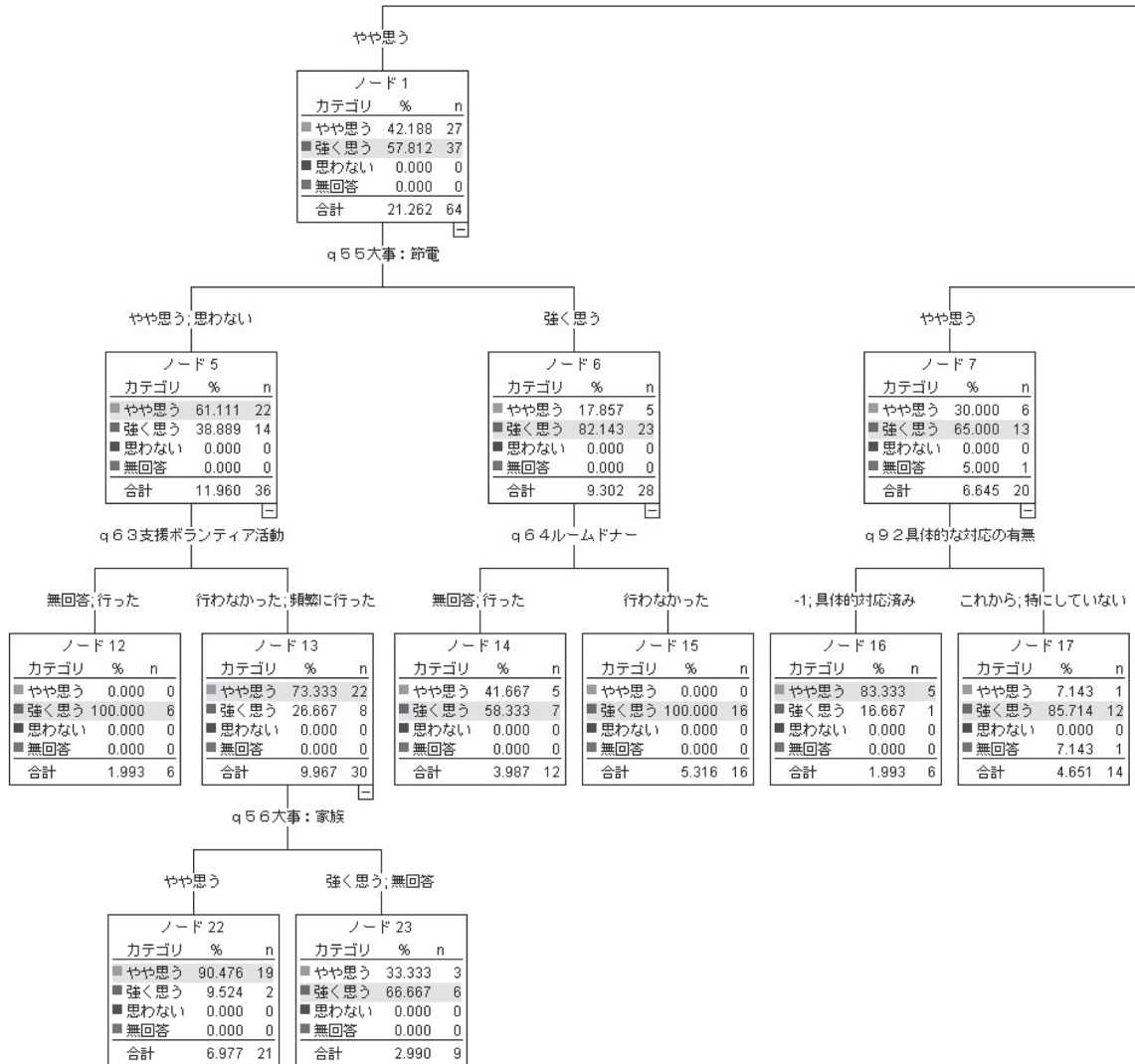
11 福島の被災地にエールを一言 責任を持って伝えます

( )

ご協力ありがとうございました。

お帰りの際に出入り口の回収箱に投函をお願いします。

樹形図1



やや思う

ノード22		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	90.476	19
■ 強く思う	9.524	2
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	6.977	21

強く思う; 無回答

ノード23		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	33.333	3
■ 強く思う	66.667	6
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.990	9

q 5 4 大事：目の前にある日常

ノード 0		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	20.598	62
■ 強く思う	62.126	187
■ 思わない	0.332	1
■ 無回答	16.944	51
合計	100.000	301

q 5 7 大事：友人

強く思う

思わない

無回答

ノード 2		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	17.470	29
■ 強く思う	79.518	132
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	3.012	5
合計	55.150	166

ノード 3		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	50.000	5
■ 強く思う	40.000	4
■ 思わない	10.000	1
■ 無回答	0.000	0
合計	3.322	10

ノード 4		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	1.639	1
■ 強く思う	22.951	14
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	75.410	46
合計	20.266	61

q 5 8 大事：地域社会の人間関係

q 6 4 ルームドナー

強く思う

無回答

無回答

行かなかった;頻りに行った

ノード 8		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	16.667	23
■ 強く思う	83.333	115
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	45.847	138

ノード 9		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	50.000	4
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	50.000	4
合計	2.658	8

ノード 10		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	21.053	12
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	78.947	45
合計	18.937	57

ノード 11		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	25.000	1
■ 強く思う	50.000	2
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	25.000	1
合計	1.329	4

q 5 3 大事：自分のできる支援

q f 1 性別

やや思う

強く思う;無回答

女

無回答;男

ノード 18		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	57.143	12
■ 強く思う	42.857	9
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	6.977	21

ノード 19		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	9.402	11
■ 強く思う	90.598	108
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	38.870	117

ノード 20		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	32.353	11
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	67.647	23
合計	11.296	34

ノード 21		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	4.348	1
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	95.652	22
合計	7.641	23

q 7 5 日本社会の変化を希望

q 5 6 大事：家族

やや思う;無回答

強く思う

やや思う

強く思う;無回答

ノード 24		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	100.000	8
■ 強く思う	0.000	0
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.658	8

ノード 25		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	30.769	4
■ 強く思う	69.231	9
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	4.319	13

ノード 26		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	57.143	4
■ 強く思う	42.857	3
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.326	7

ノード 27		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	6.364	7
■ 強く思う	93.636	103
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	36.545	110

q 6 7 義援金付きサービス

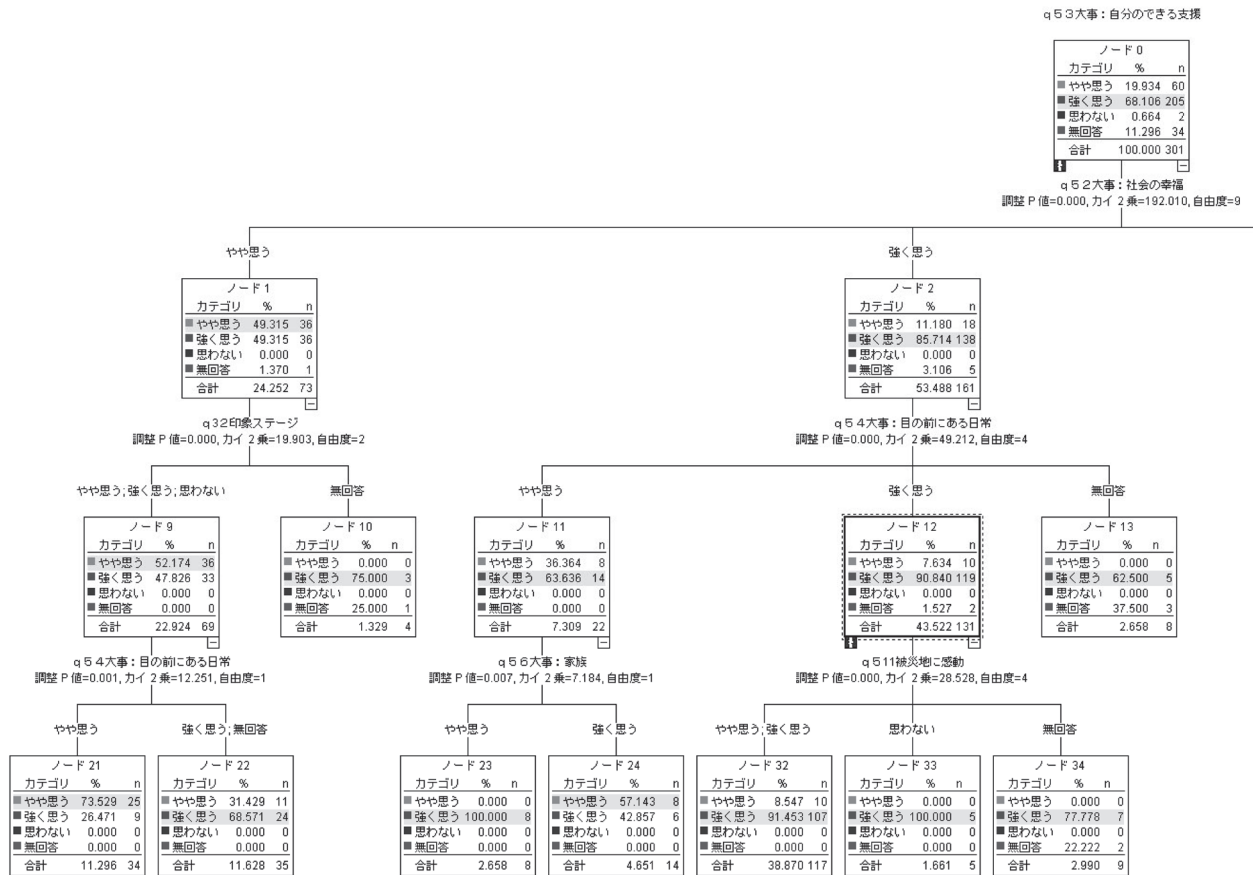
無回答;行った;頻りに行った

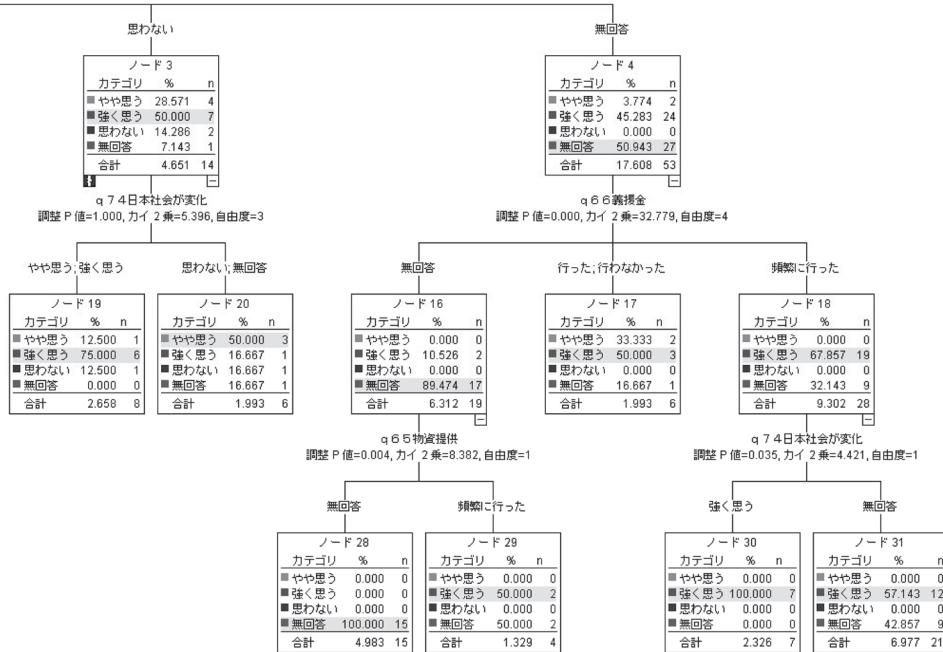
行かなかった

ノード 28		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	1.176	1
■ 強く思う	98.824	84
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	28.239	85

ノード 29		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	24.000	6
■ 強く思う	76.000	19
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	8.306	25

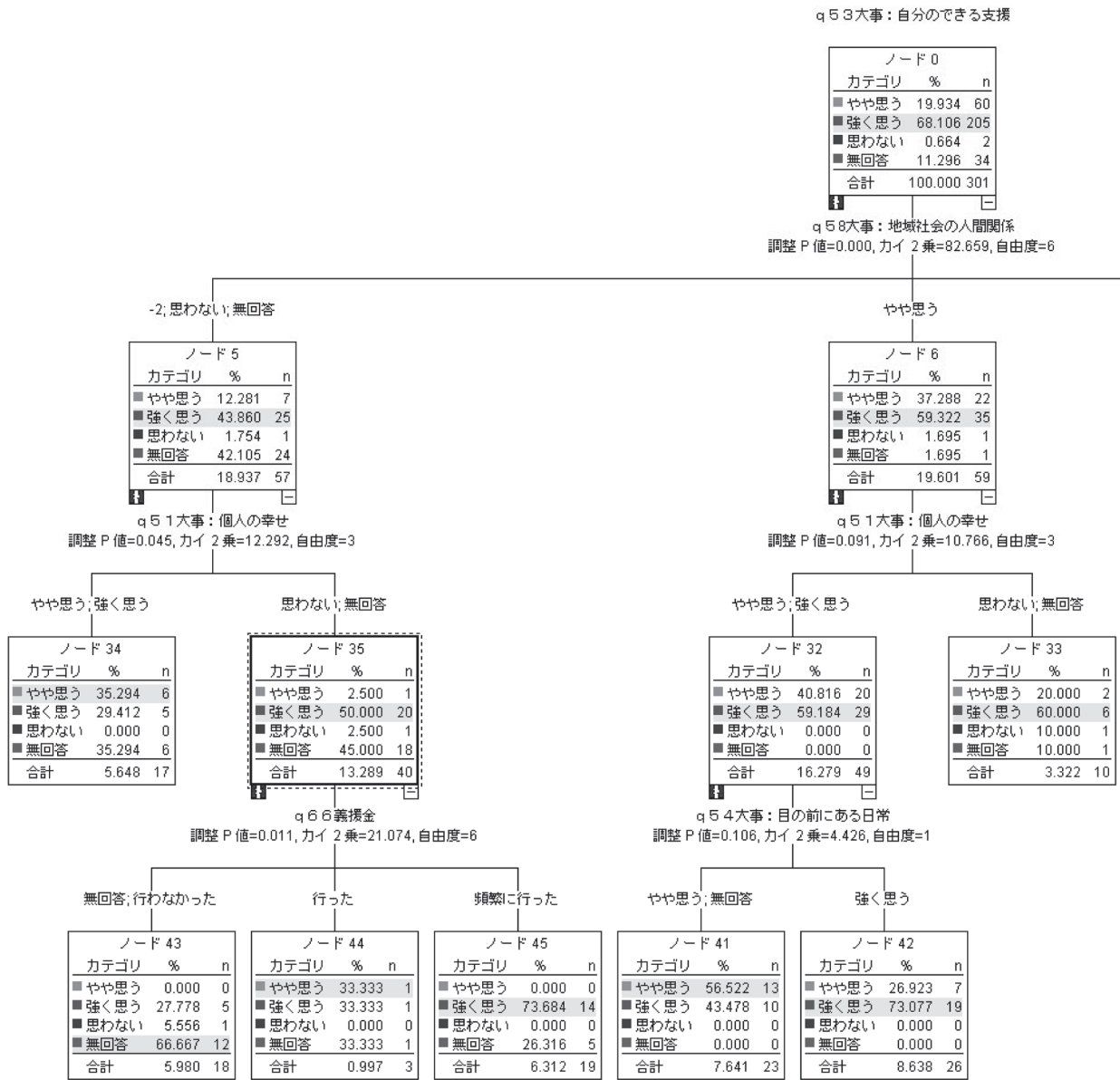
# 樹形図2

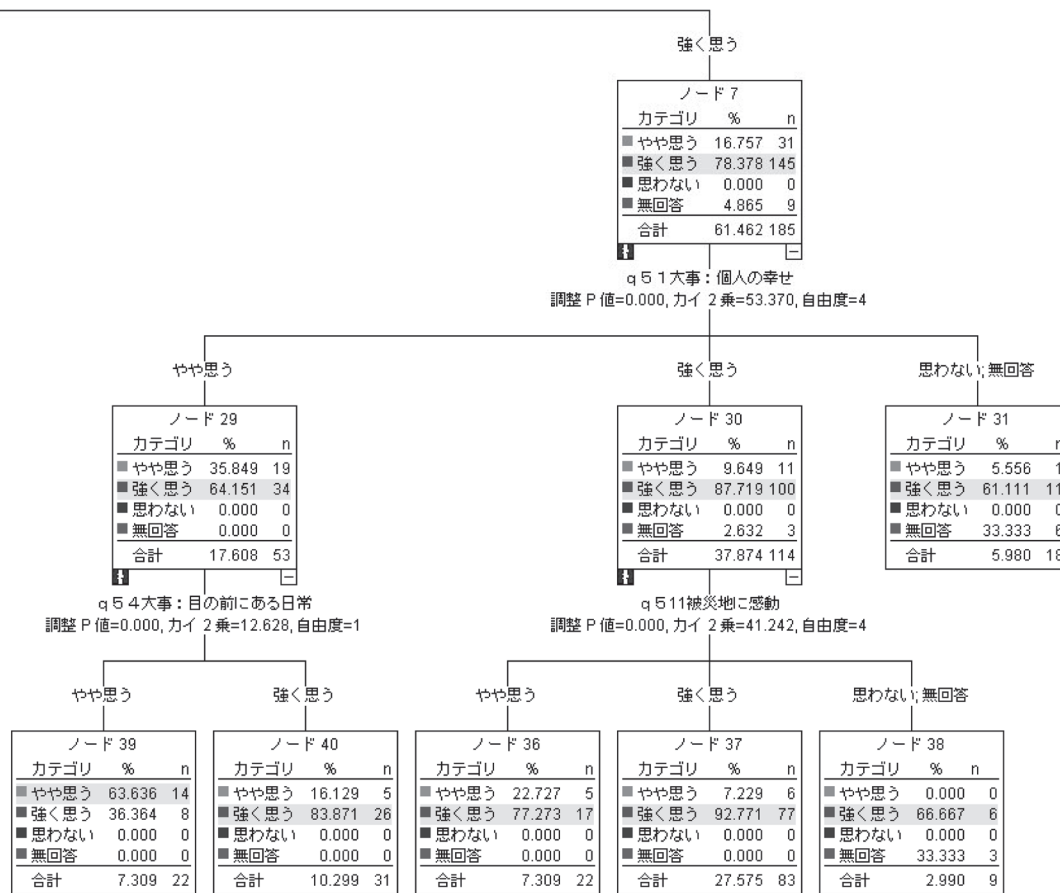




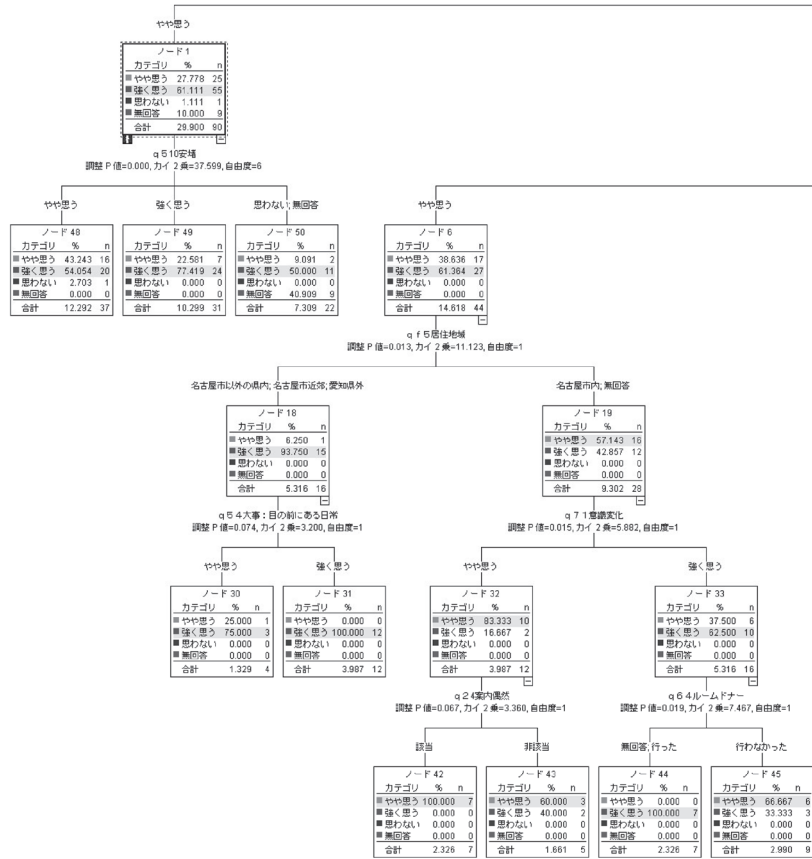


樹形図3





樹形図4



q53大事：自分のできる支援

ノード0		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	19.934	60
■ 強く思う	88.108	265
■ 思わない	0.584	2
■ 無回答	11.298	34
合計	100.000	301

q91 東海東海南海海地帯が起きる  
調査 P値=0.498, カイ2乗=15.045, 自由度=6

ノード2		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	16.393	30
■ 強く思う	73.779	135
■ 思わない	0.545	1
■ 無回答	9.290	17
合計	60.797	163

ノード3		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	17.867	5
■ 強く思う	53.571	15
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	28.571	8
合計	9.302	28

q511 被災地へ感謝  
調査 P値=0.000, カイ2乗=107.976, 自由度=9

ノード7		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	10.870	10
■ 強く思う	88.043	81
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	1.097	1
合計	30.565	92

ノード8		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	80.000	4
■ 思わない	20.000	1
■ 無回答	0.000	0
合計	1.661	5

ノード9		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	7.143	3
■ 強く思う	54.762	23
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	38.095	16
合計	13.953	42

ノード10		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	50.000	4
■ 強く思う	50.000	4
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.658	8

ノード11		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	11.111	1
■ 強く思う	88.889	8
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.960	9

ノード12		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	27.273	3
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	72.727	8
合計	3.854	11

q54大事：目の前にある日常  
調査 P値=0.000, カイ2乗=30.383, 自由度=4

ノード20		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	35.294	6
■ 強く思う	64.706	11
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	5.648	17

ノード21		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	5.714	4
■ 強く思う	94.286	66
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	23.256	70

ノード22		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	80.000	4
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	20.000	1
合計	1.661	5

ノード23		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	6.667	1
■ 強く思う	26.667	4
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	66.667	10
合計	4.983	15

ノード24		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	60.000	2
■ 強く思う	25.000	1
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	25.000	1
合計	1.329	4

ノード25		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	78.261	18
■ 強く思う	11.739	5
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	9.000	4
合計	7.641	23

ノード26		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	75.000	3
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	25.000	1
合計	1.329	4

ノード27		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	0.000	0
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	100.000	7
合計	2.326	7

q55大事：家族  
調査 P値=0.004, カイ2乗=3.438, 自由度=1

ノード34		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	12.500	1
■ 強く思う	87.500	7
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.658	8

ノード35		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	55.556	5
■ 強く思う	44.444	4
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.990	9

q55大事：許電  
調査 P値=0.023, カイ2乗=7.575, 自由度=2

ノード36		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	20.000	1
■ 強く思う	60.000	3
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	20.000	1
合計	1.661	5

ノード37		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	10.000	1
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	90.000	3
合計	3.322	10

q57 年齢  
調査 P値=0.004, カイ2乗=14.603, 自由度=1

ノード38		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	100.000	16
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	5.316	16

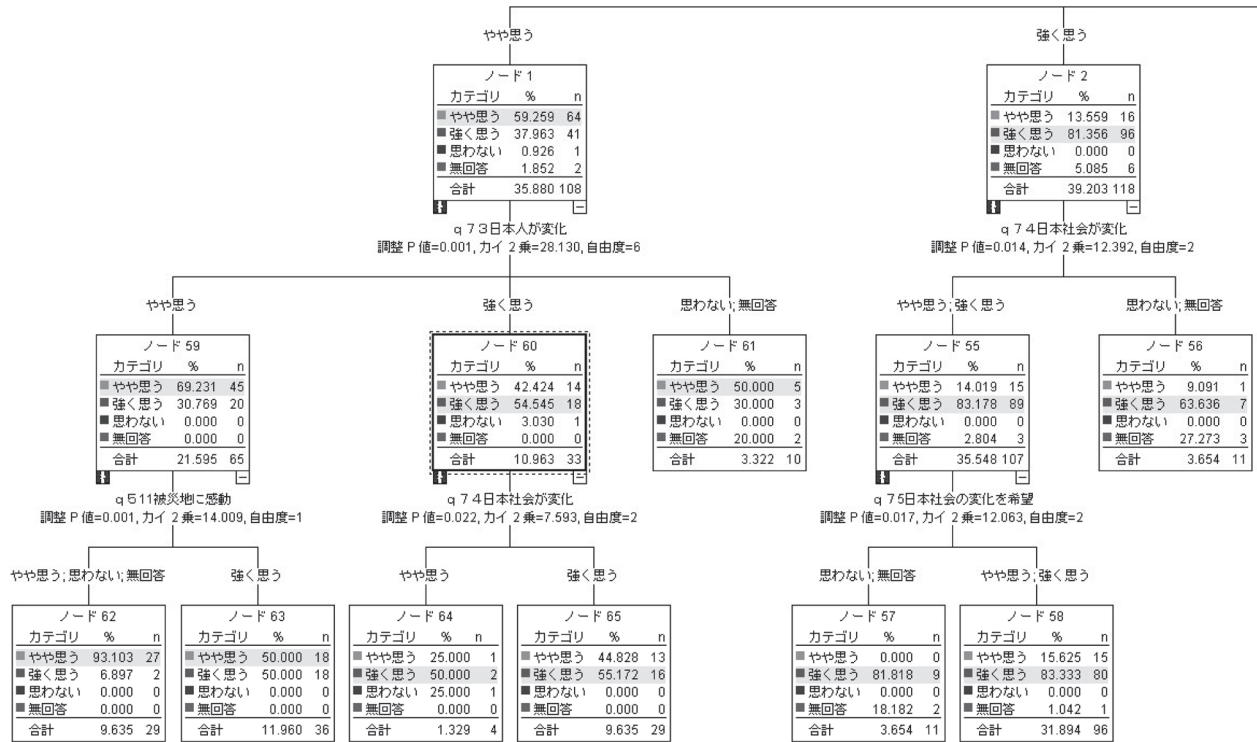
ノード39		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	35.714	2
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	71.429	5
合計	2.326	7

q32 印刷ステージ  
調査 P値=0.096, カイ2乗=2.722, 自由度=1

ノード46		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	80.000	4
■ 強く思う	20.000	1
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	1.661	5

ノード47		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	25.000	1
■ 強く思う	75.000	3
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	1.329	4

樹形図5



q 7 1 意識変化

ノード 0		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	28.571	86
■ 強く思う	52.824	159
■ 思わない	2.326	7
■ 無回答	16.279	49
合計	100.000	301

q 7 2 生活変化  
調整 P 値=0.000, カイ 2 乗=328.083, 自由度=9

思わない

ノード 3		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	46.154	6
■ 強く思う	7.692	1
■ 思わない	46.154	6
■ 無回答	0.000	0
合計	4.319	13

q 4 2 継続小規模  
調整 P 値=0.024, カイ 2 乗=9.647, 自由度=2

やや思う; 強く思う

ノード 10		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	14.286	1
■ 強く思う	0.000	0
■ 思わない	85.714	6
■ 無回答	0.000	0
合計	2.326	7

思わない

ノード 11		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	83.333	5
■ 強く思う	16.667	1
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	1.993	6

無回答

ノード 4		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	33.871	21
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	66.129	41
合計	20.598	62

q 5 2 大事: 社会の幸福  
調整 P 値=0.001, カイ 2 乗=13.757, 自由度=1

やや思う; 思わない; 無回答

ノード 12		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	21.277	10
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	78.723	37
合計	15.615	47

強く思う

ノード 13		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	73.333	11
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	26.667	4
合計	4.983	15

q 6 1 支援祈り  
調整 P 値=0.025, カイ 2 乗=8.460, 自由度=1

無回答; 行かなかった

ノード 23		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	14.634	6
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	85.366	35
合計	13.621	41

行った; 頻りに行った

ノード 24		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	66.667	4
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	33.333	2
合計	1.993	6

強く思う

ノード 25		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	100.000	7
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	0.000	0
合計	2.326	7

無回答

ノード 26		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	50.000	4
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	50.000	4
合計	2.658	8

q 3 1 印象被災地の農産物  
調整 P 値=0.068, カイ 2 乗=6.694, 自由度=1

やや思う; 思わない; 無回答

ノード 37		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	0.000	0
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	100.000	20
合計	6.645	20

強く思う

ノード 38		
カテゴリ	%	n
■ やや思う	0.000	0
■ 強く思う	28.571	6
■ 思わない	0.000	0
■ 無回答	71.429	15
合計	6.977	21